

# 授受本動詞「あげる」「くれる」「もらう」の習得 —日本語を外国語とする韓国人日本語学習者を対象として—

尹 喜貞

## 要 旨

本稿では、日本語を外国語とする韓国人日本語学習者 186 を対象に、文産出テストを用いて授受本動詞「あげる」「くれる」「もらう」の習得状況を調査した。その結果、1) 日本語習熟度が高くなるにつれ授受本動詞の習得が進むこと、2) 物の授受方向が「他者→私」の場合、「もらう」を「くれる」より好んで使用すること、3) 授受本動詞におかれる与え手と受け手の位置づけは日本語習熟度が高くなるにつれ習得されること、4) 授受本動詞における視点の置き方は日本語習熟度が高くなっても習得されにくいこと、5) 日本語習熟度の差に関わらず、「もらう」の視点制約について分かっていない可能性が高いこと等が明らかになった。

【キーワード】韓国人日本語学習者、文産出テスト、授受本動詞、日本語習熟度、視点

## 1. はじめに

物の授受を表す日本語の授受本動詞「あげる」「くれる」「もらう」の三項対立は、他の言語にほとんど見られない日本語の特徴の一つであり(山田 1999)、日本語学習者にとっては習得しにくい文法項目の一つといわれている(堀口 1984; 荒巻 2003)。

日本語学習者(成人)が授受本動詞をどのように処理しどのように習得を進めているかの習得研究は 1995 年中半以降行われている(大塚 1995; 坂本・岡田 1996; 岡田 1996, 1997; 韓 2003)。その中でも韓国話話者を対象とした研究には大塚(1995)と韓(2003)があり、日本語を第二言語とする韓国話話者の口頭データ(大塚 1995)と日本語を外国語とする韓国話話者の空欄補充形式(韓 2003)から授受本動詞の習得状況を調査している。

しかし、各学習環境における学習者の授受本動詞の習得状況を明らかにするためには、口頭データや空欄補充形式とともに文産出テストや作文等の多様な調査資料を用いた研究が必要である。

そこで、本稿は日本語を外国語とする韓国人日本語学習者の授受本動詞の習得状況を明らかにすることを目的として、文産出テストにおける韓国話話者の誤用を「意味論的な誤り」と「語用論的な誤り」という 2 つの観点から分析する。

意味論的な誤りとは、例(1)のように授受本動詞の使用は文法的には正しいが、与え手と受け手の位置づけが誤っているために、本来の物の授受方向と全く正反対でありかつ文意の命題関係が正しく伝えられていないものである。

一方、語用論的な誤りとは、例(2)と例(3)のように文意の命題関係は正しく表現されているが、日本語の特徴である視点の制約を破っているために文法的に間違った表現(例(2))もしくは不自然な表現になるものである(例(3))。

(1) 母に私の編んだ手袋をもらいました(→あげました)「私→他者」

(韓 2003 : 312)

(2) アニルさんは私にテレビをあげました(→くれました)「他者←私」

(『日本語誤用例小辞典』市川 1997 : 178)

(3) 田中さんは私にテープをもらいました(→私が～あげました)「私→他者」

(『日本語誤用例小辞典』市川 1997 : 184)

\*下線：誤りの部分

\* (→)：本来使うべき正しい表現、

\* 「」：話者が表現したいと意図する物の授受方向

## 2. 先行研究

### 2.1 日本語の授受本動詞

ここでは、物の授受を表す日本語の授受本動詞「あげる」「くれる」「もらう」の特徴を簡単にまとめる。

奥津(1983)によると、日本語の授受本動詞「あげる」「くれる」「もらう」は、主語の立て方(与え手と受け手のいずれを主語にするか)によって与え動詞「あげる・くれる」と受け動詞「もらう」に対立される。日本語以外の多くの言語における授受本動詞は「主語の立て方」によって二項対立として現れることが多い(山田 1999)。しかし、日本語の授受本動詞は、この主語の立て方による対立に加えて、「話者の視点(共感度: empathy)」のおき方によって使い分けられる(久野 1978)。

宮地(1965)と Kuno & Kaburaki(1975)では、「あげる」「くれる」「もらう」のそれぞれの構文における与え手の位置と受け手の位置、「話者の視点」の位置について説明している。つまり、日本語の与え動詞「あげる」と「くれる」は、両方とも与え手が主語となるが、「あげる」は、話者の視点が文の主語におかれ(1)、「くれる」は、話者の視点が間接目的語におかれる(2)。一方、日本語の受け動詞「もらう」は、受け手が主語となり、話者の視点は常に文の主語におかれる(3)。次の(1)(2)(3)は、坂本・岡田(1996: 158)を参照にして作成した。

- |     |            |            |            |
|-----|------------|------------|------------|
| (1) | X-が<br>与え手 | Y-に<br>受け手 | <u>あげる</u> |
|     | <話者の視点>    |            |            |
| (2) | X-が<br>与え手 | Y-に<br>受け手 | <u>くれる</u> |
|     | <話者の視点>    |            |            |
| (3) | X-が<br>受け手 | Y-に<br>与え手 | <u>もらう</u> |
|     | <話者の視点>    |            |            |

### 2.2 先行研究

日本語学習者(成人)による授受本動詞の習得研究を調査資料別に見ると、口頭データの調査(大塚 1995)、空欄補充形式の調査(坂本・岡田 1996; 韓 2003)、坂本・岡田(1996)と同じ空欄補充形式調査に自由作文の分析を追加した岡田(1996)、4ヶ月に

渡り、毎週書かれたジャーナルを調査した岡田(1997)等がある。しかし、授受本動詞の文産出能力をはかるための文産出テストの調査はまだ行われていない。

これらの研究では、日本語学習者の日本語レベルがあがるにつれ授受本動詞の習得が進むことが明らかになった(大塚 1995; 坂本・岡田 1996; 岡田 1996; 韓 2003)。

坂本・岡田(1996)と岡田(1996)は、正用率を分析し、初級終了レベルでは学習者の母語によって正用率が異なるが、上級レベルとなると学習者の母語に関わらず、正答率がほぼ同じになる。そして視点の置き方が正用率に大きく影響すると報告している。

誤用の型については、学習者の母語や日本語能力レベルによって異なり(坂本・岡田 1996; 岡田 1996; 韓 2003)、特に「あげる」と「くれる」との混同が日本語学習者に多くみられると報告されている(坂本・岡田 1996; 岡田 1996; 韓 2003)。

授受本動詞の習得順序については、日本語を第二言語とする日本語学習者は主語と視点が一致する「あげる」と「もらう」のほうが、間接目的語に視点がおかれる「くれる」より習得されやすい(大塚 1995; 岡田 1996)こと、「あげる>もらう>くれる」の順に習得する(岡田 1997)という結果が出ている。これに対して、日本語を外国語とする英語話者と韓国語話者は「もらう>くれる>あげる」の順に、中国語話者は「もらう>あげる>くれる」の順に習得するという結果もある(韓 2003)。

そこで、学習環境や母語等が授受本動詞の習得に及ぼす影響を明らかにするためには、学習者の多様な調査資料を用いた学習環境別や母語別の分析が必要であると考えられる。

### 3. 研究目的と研究課題

本稿では、日本語を外国語とする韓国人日本語学習者を対象として授受本動詞「あげる」「くれる」「もらう」の習得状況を明らかにする。そのために、次の2つの研究課題を設定する。

- (1) 日本語習熟度が高くなるにつれ、授受本動詞の習得は進むか
- (2) 誤用の形態、種類(意味論的な誤りと語用論的な誤りの観点から)は、日本語習熟度によって異なるか

## 4. 調査の概要

### 4.1 被験者

調査の被験者は、韓国の大学で日本語を専攻する大学2年生、3年生、4年生の日本語学習者186名(以下、KL)と日本語母語話者46名(以下、NS)である。日本語習熟度の測定には、KLにSPOT<sup>[1]</sup>(Simple Performance-Oriented Test, Ver.D, E)実施し、点数によって上位(58名)、中位(65名)、下位(63名)の3群に分けた。表1は、各群の人数、SPOTの平均、標準偏差である。

表1 SPOT得点の記述統計量(満点:60点)

日本語習熟度	人数	平均(標準偏差)
下位群	63	30.0(8.18)
中位群	65	46.7(2.97)
上位群	58	55.6(2.35)

### 4.2 調査資料

本稿では、調査資料として「文産出テスト」を用いた。「文産出テスト」は、授受本動詞の文産出能力を測ろうとするテストで、田中(1997)の文産出テスト(絵を使用した文産出テスト)を参考に作成した。学習者は絵に示された物の授受方向(「私→他者」と「他者→私」と語彙の情報に従い文を作成する(本稿末尾の資料参照)。また被験者が質問を正確に理解できるよう質問と指定単語に韓国語の翻訳をつけた。

問題の構成は、物が話者[私]から他者に移動する場合(以下、「私→他者」)の4問と他者から話者[私]に移動する場合(以下、「他者→私」)の4問(全8題)でランダムに配列した。

### 4.3 得点化と分析方法

各問題で正用を1点、誤用を0点とした(得点範囲は物の授受方向別に最低0点～最高4点である)。正用と誤用において日本語習熟度間に差があるかどうかを明らかにするために、一元配置分散分析<sup>[2]</sup>を用いて検証する。要因は、日本語習熟度で、下位、中位、上位の3水準である。なお、要因に有意差がある場合、Tukeyの多重比較<sup>[3]</sup>を行う。

正用と誤用の判定に関しては、目標言語とする言語形態の使用が認められたものを正用(「私→他者」の際、「私が～あげる」、「他者→私」の際、「他者が～くれる」「私が～もらう」とし、それ以外のものを誤用とする。また誤用を次のような枠組みに

そって分類する(一文の中に両方の誤りが含まれる場合もあるが、これは意味論的・語用論的な誤りとよぶ)。

- (1) 与え手と受け手(命題関係)を誤って表現して物の授受方向が事実と逆となったもの(以下、意味論的な誤り)
- (2) 命題関係は正しく表現されているが、視点のおき方が間違っているために文法的に間違っているかもしくは不自然になったもの(以下、語用論的な誤り)

## 5. 調査結果

### 5.1 日本語習熟度別の平均正用頻度

表2は、KLの授受本動詞の平均正用頻度と標準偏差を日本語習熟度別に示したものである。

表2 日本語習熟度別の平均正用頻度(標準偏差)

日本語習熟度	人数	平均(標準偏差)
下位群	63	6.40(1.80)
中位群	65	7.00(1.40)
上位群	58	7.27(1.18)

平均正用頻度は日本語習熟度によって差があるかどうか一元配置分散分析で検証した結果、有意であった( $F_{(2,183)}=5.56, P<.01$ )。なおTukeyの多重比較の結果、平均正用頻度は上位群のほうが下位群より有意に高かった( $MSe=12.37, P<.01$ )。

図1は、日本語習熟度別の平均正用頻度の変化を表したものである。

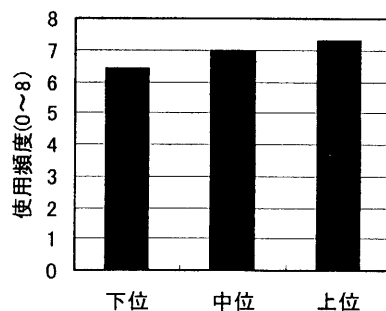


図1 日本語習熟度別の平均正用頻度

### 5.2 物の授受方向による正用と誤用

ここでは、物の授受方向別のNSの回答を基に、KLの正用、誤用を分類した。また表3に見られる

誤用以外に「～が私からくれる(私→他者)」と「～から私にくれる、～が私からくれる(他者→私)」等の助詞の誤りが下位群と中位群でやや少しみられたが、本稿では誤用を意味論的な誤り、語用論的な誤りの観点から分析を進める。

表 3 は、日本語習熟度別に正用、誤用を分類しまとめたもので、日本語習熟度別の正用、誤用の出現を「○」で表した。また、意味論的な誤り、語用論的な誤り、意味論的・語用論的な誤りを「意誤」、「語誤」、「意・語誤」で表した。

表 3 物の授受方向別の正用と誤用

私→他者	回答文	下位	中位	上位	N S	他者→私	回答文	下位	中位	上位	N S
正用	私が～あげる	○	○	○	○	正用	他者が～くれる	○	○	○	○
							私が～もらう	○	○	○	○
意誤	私が～もらう	○	.	.	.	意誤 語誤	私が～あげる	○	○	.	.
	他者が～くれる	○	○	.	.		他者が～あげる	○	○	○	.
語誤	私が～くれる	○	○	○	.	意・語誤	私が～くれる	○	.	○	.
	他者が～もらう	○	○	○	.		他者が～もらう	○	.	○	.

表 3 から、物の授受方向が「私→他者」の場合、意味論的な誤りと語用論的な誤りがみられるのに対して、物の授受方向が「他者→私」の場合は、意味論的な誤り、語用論的な誤り、意味論的・語用論的な誤りがみられることがわかる。そこで、まず、物の授受方向が「私→他者」の場合、KL にみられる正用、誤用の平均頻度と標準偏差を表 4 に示した。

表 4 日本語習熟度別の正用、誤用の平均頻度(標準偏差)「私→他者」

	下位	中位	上位
正用① 私が～あげる	2.97 (1.24)	3.26 (1.06)	3.38 (1.02)
意誤② 私が～もらう	0.05 (0.38)	.	.
意誤③ 他者が～くれる	0.09 (0.35)	0.01 (0.12)	.
語誤④ 私が～くれる	0.32 (0.91)	0.32 (0.75)	0.17 (0.75)
語誤⑤ 他者が～もらう	0.52 (0.80)	0.38 (0.63)	0.45 (0.75)

表 4 から、「私→他者」の場合、1 つの正用と 4 つの誤用の形態があることがわかる。誤用の形態は、日本語習熟度別に下位で 4 つ、中位で 3 つ、上位で 2 つが見られ、日本語習熟度が高くなるにつれ、少なくなっていた。誤用の種類については、語用論的

な誤り「私が～くれる」と「他者が～もらう」が全群に見られ、意味論的な誤りである「私が～もらう」は中位群、「他者が～くれる」は上位群でなくなっていた。そこで、正用と誤用それぞれの平均頻度は日本語習熟度間による差があるかどうかを調べるために、一元配置分散分析を実施した。その結果、どの項目においても有意差はなかった。これにより、物の授受方向が「私→他者」の場合における平均正用頻度と平均誤用頻度は日本語習熟度によって差がないことが示された。

次に、物の授受方向が「他者→私」の場合、KL にみられるそれぞれの正用、誤用の平均頻度と標準偏差を表 5 に示した。

表 5 日本語習熟度別の正用、誤用の平均頻度(標準偏差)「他者→私」

	下位	中位	上位
正用① 他者が～くれる	1.00 (1.06)	1.52 (1.08)	1.48 (0.98)
正用② 私が～もらう	2.42 (1.23)	2.21 (1.07)	2.41 (0.95)
意誤③ 私が～あげる	0.06 (0.24)	0.01 (0.12)	.
語誤④ 他者が～あげる	0.41 (0.94)	0.20 (0.64)	0.05 (0.22)
意・語誤⑤ 私が～くれる	0.01 (0.13)	.	0.03 (0.18)
意・語誤⑥ 他者が～もらう	0.06 (0.30)	.	0.01 (0.13)

表 5 から、物の授受方向が「他者→私」の場合、KL は日本語習熟度に関わらず NS と同じく「もらう」を「くれる」より多く使用していることがわかる。さらに誤用の形態は、日本語習熟度別に、下位で 4 つ、中位で 2 つ、上位で 3 つ見られた。誤用の種類については、語用論的な誤り「他者が～あげる」が全群に見られ、意味論的な誤り「私が～あげ

る」は上位群でなくなっていた。また意味論的・語用論的な誤り「私が～くれる」と「他者が～もらう」は中位群でいったんなくなるようにみられたが、上位群で再び現れていた。そこで、「私→他者」の場合と同じく、正用と誤用それぞれの平均頻度は日本語習熟度間による差があるかどうかについて、一元配置分散分析を実施した。その結果、日本語習熟度間の平均は、正用①「他者が～くれる」( $F_{(2,183)} = 4.90, P < .01$ )と誤用④「他者が～あげる」で有意であった( $F_{(2,183)} = 4.33, P < .05$ )。そこで、*Tukey*による多重比較を実施した結果、正用①「他者が～くれる」の平均頻度は下位群のほうが、中位群と上位群より有意に低かった( $MSe = 5.32, P < .05$ )。また、誤用④「他者が～あげる」の平均頻度は、下位群のほうが上位群より有意に高かった( $MSe = 2.00, P < .05$ )。

## 6. 調査結果および考察

KLの正用頻度は、下位群と上位群の間に有意差があり、日本語習熟度が高くなるにつれ、正用頻度も高くなるという結果が得られた。これは、日本語習熟度が高くなるとともに、授受本動詞の習得は進むことを示していると考えられる。

では、物の授受方向によって、KLはどのように授受本動詞を使っているだろうか。

まず、物の授受方向が「私→他者」の場合、KLは、正用「あげる」を日本語習熟度の差に関わらず最も多く使っていることがわかった。しかし、上位群になっても正用「あげる」の使用頻度は、100%ではない。そこで、誤用の形態と種類を日本語習熟度別に分析した結果、意味論的な誤り「他者が～くれる」、「私が～もらう」と語用論的な誤り「私が～くれる」、「他者が～もらう」がみられた。

また、意味論的な誤り「他者が～くれる」、「私が～もらう」は、それぞれ、中位群、上位群でなくなるが、語用論的な誤り「私が～くれる」、「他者が～もらう」は、日本語習熟度の差に関わらず全群に多く観察された。

次に、物の授受方向が「他者→私」の場合、KLは、全群においてNSと同じく、「もらう」を「くれる」より多く使っていることがわかった。これは、話者[私]が受け手の場合、視点のおき方によって「あげる」と対立している「くれる」より、対立動詞がない「もらう」を好んで使用しているのではな

いかと考えられる。

また「もらう」の使用頻度は、日本語習熟度間に差はなかったが、「くれる」の使用頻度は、下位群のほうが中位群、上位群より低かった。これは、「くれる」の使用が、下位群から中位群になるにつれ、増加することを示していると考えられる。なお、誤用の形態と種類をみると、意味論的な誤り「私が～あげる」、語用論的な誤り「他者が～あげる」、意味論的・語用論的な誤り「私が～くれる」、「他者が～もらう」がみられた。日本語習熟度別には、意味論的な誤り「私が～あげる」は、上位群でなくなり、語用論的な誤り「他者が～あげる」は、日本語習熟度が高くなるにつれ、少なくなるものが明らかになった。しかし、意味論的・語用論的な誤り「私が～くれる」、「他者が～もらう」は、その使用頻度は他の誤用より最も低いが、日本語習熟度が高くなっても見られることがわかった。

以上のことから、授受本動詞における意味論的な誤りは、物の授受方向と関係せず、日本語習熟度が高くなるにつれて、なくなっていくことが明らかになった。また、語用論的な誤りの中で、「あげる」と「くれる」との混同がKLに多くみられることは、韓(2003)の結果と同じであった。しかし、KLにとって「あげる」を「くれる」とする誤用のほうが「くれる」を「あげる」とする誤用より多いこと、日本語習熟度の差に関わらず「もらう」の視点制約を分かっている可能性が高いことが本調査によって明らかになった。

これらは、KLにとって、授受本動詞における与え手と受け手の位置づけの習得は日本語習熟度が高くなるにつれ習得されるが、視点の置き方は日本語習熟度が高くなっても習得されにくいことを示している。

また、日本語の教育現場では、「あげる」と「くれる」との使い分けとともに、「もらう」の視点制約についても明示的に教示すべきであることが示唆された。

## 7. まとめと今後の課題

本稿では、日本語を外国語とする韓国人日本語学習者を対象に、授受本動詞「あげる」「くれる」「もらう」の習得状況を日本語習熟度別に調査した。その結果、次のことが明らかになった。1)日本語習熟度が高くなるにつれ、授受本動詞の習得が進む。

2)物の授受方向が「他者→私」の場合、「もらう」を「くれる」より好んで使用する。3)授受本動詞におかれる与え手と受け手の位置づけは、日本語習熟度が高くなるにつれ習得される。4)授受本動詞における視点の置き方は日本語習熟度が高くなっても習得されにくい。5)日本語習熟度の差に関わらず、「他者が～もらう」が誤用であることを分かっている可能性が高い。

今後は、次の2つを課題として研究を続けていきたい。第一に、「もらう」を正しく使っている学習者を対象として「もらう」の視点の制約について分かっているかどうかについて追加調査を行いたい。

第二に、これまでの先行研究の結果より、学習者の学習環境によって授受本動詞の習得が異なる可能性が窺えるが、両環境の学習者の日本語レベルを統一した分析まだなされていない。そこで、学習環境が異なる同一レベルの韓国人学習者を対象とし学習環境が授受本動詞の習得に与える影響について追究したい。

## 注

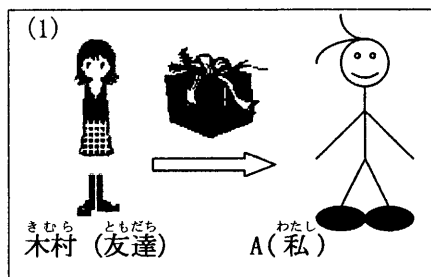
1. SPOT(Simple Performance- Oriented Test)は、筑波大学で開発された日本語能力を測定するテストで、自然なスピードの音声テープを聞きながら、テープと同じ文が書かれた解答用紙の空所にひらがな1字を書き込むテストで、現在問題の難易度の違う7つのバージョンがある(関 1997)。また、SPOT は学習者の日本語能力を総合的に測定できるとされ、評価に広く使用されている(Sasaki 2001)。本稿では難易度が低いものから3番目、4番目のバージョンD・Eを使用した。
2. 一元配置分散分析は、英語の原語、One-way ANOVA (analysis of variance)の日本語訳で、一つの要因(source of variance)について、3つ以上の平均を比べる統計処理方法の一つである。詳しくは、『(新訂)ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法』(田中敏・山際勇一 2003)を参照。
3. Tukey による多重比較は、多重比較の方法の一つで3つ以上の平均がある場合に2平均ずつを対にした「多数回の比較」である。詳しくは、『(新訂)ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法』(田中敏・山際勇一 2003)を参照。

## 参考文献

- 荒巻朋子 (2003) 「授受文形成能力と場面判断能力の関係—質問紙調査による授受表現の誤用分析から—」『日本語教育』117, 43-52.
- 市川保子 (1997) 『日本語誤用例文小辞典』凡人社
- 大塚純子 (1995) 「中上級日本語学習者の視点表現の発達について—立場志向文を中心に—」『言語文化と日本語教育』9, 281-292.
- 岡田久美 (1996) 「授受構文習得における問題点について」『第7回第二言語習得研究会全国大会』京都外国語大学
- 岡田久美 (1997) 「授受動詞の使用状況の分析—視点表現における問題点の考察」『平成9年度日本語教育学会春季大会予稿集』81-86.
- 奥津敏一郎 (1983) 「授受動詞の対照研究—日・朝・中・英の比較—」『日本語学』2, 22-30.
- 久野暲 (1978) 『談話の文法』大修館
- 坂本正・岡田久美 (1996) 「日本語の授受動詞の習得について」『アカデミア—文学・語学編—』61, 南山大学 157-202.
- 田中敏・山際勇一 (2003) 『(新訂)ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法』教育出版
- 田中真理 (1997) 「視点・ヴォイス・複文の習得要因」『日本語教育』92, 107-118.
- 韓先照 (2003) 「「あげる」「くれる」「もらう」の習得について—英語話者と中国語話者、韓国語話者を比較して—」『日本學報』57, 韓国日本學會 303-319.
- 堀口純子 (1984) 「授受表現にかかわる誤りの分析」『日本語教育』52, 91-103.
- 牧野成一他 (2001) 『ACTFL OPI 入門』アルク
- 宮地裕 (1965) 「敬語の解釈—主としていわゆるく謙讓語>とその周辺—」『ことばの研究』第二集 国立国語研究所
- 山田敏弘 (1999) 「日本語におけるベネファクティブの記述的研究」大阪大学博士学位論文(未公開)
- 閔光準 「일본어 능력측정방법으로서의 SPOT 의 특성에 관한 연구」『韓国日本語文學會』3, 23-44.
- Kuno, S. & Kaburaki, E. (1975) Empathy and syntax. In S. Kuno (Ed.), *Harvard Studies in Syntax and Semantics, vol.1*, Department of Linguistics, Harvard University, 1-73
- Sasaki, Y. (2001) The predictive validity of SPOT and self-assessment questionnaire. *Melbourne Papers in Language Testing*, 9, 2, 30-55.

稿末資料(頁数の制限上、全8題中1題のみ掲載。また韓国語の翻訳文も省略)

問題：あなたはAさんです。絵(友達または会社の同僚の会話)をみて何があったか第三者に話す気持ちで1つの文で説明してください。『注意』：①「あげる・もらう・くれる」の中の一つの動詞を必ず使って説明してください。②各問題に書いてある指定単語は必ず使ってください。また、必要な単語があれば自由に補ってください。



(1) 指定単語：プレゼント

答え⇒

---

---

---

## The acquisition of giving/ receiving verbs "ageru", "kureru", and "morau" — The case of Korean learners of Japanese as a foreign language —

YUN Hee Jung

### Abstract

This paper reports a study examining the acquisition of the giving/ receiving verbs "ageru", "kureru", and "morau" by Korean learners of Japanese as a foreign language. The data for this research were obtained from the sentence production tests of 186 participants. Results obtained from this study were as follow: 1) As these Korean learners become more proficient in Japanese, as measured by SPOT, they improve on their performance in the sentence production test for the three verbs, 2) Korean learners tend to use "morau" more than "kureru" when expressing objects being given to them by others, 3) As Korean learners become more proficient in Japanese, they acquire the ability to position the giver and the receiver properly based on the giving/receiving verbs, 4) Even proficient Korean learners have not yet acquired the distinction of point of view between "ageru" and "kureru", and 5) There is a suggestion that high level learners have yet to acquire an accurate representation for the point of view of "morau".

【Keywords】 Korean learners, giving/receiving verbs, sentence production tests, Japanese proficiency, point of view

(Department of Applied Japanese Linguistics, Graduate School, Ochanomizu University)